

国立情報学研究所 国立大学図書館協会 共催シンポジウム

「大学からの研究成果オープンアクセス化方針を考える」

ーハーバード大学, レディング大学, 北海道大学を事例にー

A few thoughts on the “contents”; what are to be openly accessed and to whom?

加藤 憲二

(静岡大学附属図書館長)



加藤 憲二

OA ジャーナル「Microbes & Environments」と 静岡大学 SURE リポジトリ

先ほどから幾つか話は出ていましたが、私が所属する日本微生物生態学会の「Microbes & Environments」は、学会員の会費で発行しているジャーナルです。学会員であろうと非会員であろうと投稿料フリーのオープンアクセスジャーナルで、1 論文当たり 1000 ドルの費用で冊子体とオンラインジャーナルができています。もちろん JST のサーバをお借りしているということもあるのですが、これが大事なところです。2010 年 10 月、学会員の熱い努力で、ようやく 2.238 というインパクトファクターが付きまして

(図 1)。amounts という英語を使ったのは、一般的にわれわれは、molecular biology を除いて、2 を超えるという数字だと考えるからです。また、静岡大学は

The reason why I'm here, I guess;

- I was the Editor-in-chief of full open access journal of “Microbes & Environments”, which is sustained by the membership fee of the Japanese Society of Microbial Ecology consisted of just 1,000 members but **charge free both for members and non-members**.
- “Microbes & Environments” gets IF from Thomson & Reuters this year and it amounts 2.238.
- Publishing cost per paper is 1000 USD!!
- A great point of Shizuoka University's repository is; 55% of professors contribute to “SURE”, and recapture ratio of papers published from international journals amounts over 12% (3.7% for Japan).
- But, today I want to talk.....

(図 1) The reason why I'm here, I guess;

学生 1 万人、教員 700 人という地方大学ですが、われわれのリポジトリには、55.8%の教員が既に何らかの

形で論文を登録しています。私がボードの会議で「どこそこの部局はこんな数字ですね」と少し嫌味を言うと、部局ごとに頑張ってくれて、例えばリポジトリ登録を、英文校閲経費を出すための条件にしてくれた学部があります。そういう学部は登録率が上がってきます。これら二つの事例にかかわってきたということでこのシンポジウムに呼ばれたのかな、と思います。

ジャーナル高騰化とリポジトリに対する見解

私自身がジャーナルの高騰化やリポジトリに関して言いたいことは、四つに絞ることができます（図2）。

一つは、big dealの問題は当然あるのですが、あれはどう考えても long tail が問題です。

二つ目は、よく出版社は、コミュニティが広がっていると言います。中国などが非常にたくさん論文を出すようになってきて、そういうものをサポートするのにコストがかかると言います。しかし、それはちょっとおかしいのではないかと、議論の対象になる内容ではないかと思います。例えばわが国はそのはい上がる部分を自前でやってきました。

三つ目は、論文を作って発行するのにかかる substantial なコストはフリーなので、オープンアクセスジャーナルを作ることに本質的な困難はないというのが私の考え方です。そここのところを忘れないでください。レビューのための給料はもらっていないのです。

四つ目は、今日皆さん方の話を伺って考えたことなのですが、オープンアクセス、リポジトリを含めて、非常にフリーなオープンアクセスが近い将来、増えていけば、その一番のアドバンテージは、アカデミーの多様性をキープできることではないかと思います。では、日本の現状でそれはどうしたらエンドースできるのか。困難があるとしたら、タックスペイヤーへの責任という意識、あるいは自分の研究が何によって支えられているかという意識が弱いということではないでしょうか。

私自身は、30代の初めのころにこういう経験をしました。当時の東京大学の先生のお供でワシントン DC

Comments from somewhat different standpoint on hyper inflation of publishers' journals and repository

- Long tail journals must be eliminated from the “big deal”, as they spend cost.
- Who pays the cost for expanding scientific activity in academic field and regionally ?
- To realize who paid the cost for the work of peer reviewing and editing.
- The very positive point for supporting open access journals supported by contributors and/or institutional repository is to encourage the diversity of academic interest.

(図2) Comments from somewhat different standpoint on hyper inflation of publishers' journals and repository

に行ったのですが、そのとき、われわれのカウンターパートがレーガン政権のコミッティのメンバーで、パーティに呼んでくれたのです。そのパーティの講演で、ノーベル物理学賞の受賞者だったと思うのですが、高校生に向けて、準備も完璧にして大変一生懸命説明されているのです。「どうしてそんなに一生懸命するのですか」と質問したら、一言、「タックスペイヤーへの責任だ」とおっしゃったのです。そういうコンセプトが、日本の研究社会、コミュニティに根付くかどうか。多くの大学で、論文を書かなければいけないということに対する反論を考えるために時間を使う人が実は多かった。それは減ってきているとは思いますが、まだ中にはいるのではないのでしょうか。今日は非常にプラクティカルな、オープンアクセスのフレームの中のお話を皆さん真剣になさっているのですが、私はちょっと違うことを考えています。

将来を見据えた場合、コンテンツが問題です。要するに、何でもかんでも数の上でオープンアクセスになっていけばいいというものではないと思います。大学の外にいる人は何が読みたいのか。私が尊敬してやまない藤山寛美という喜劇役者は、演題を5題ぐらい用意していて、客席から一番投票の多かった演目をその場で演じるのです。大道具も5題目分用意しています。それを見て、彼こそ本物だと思いました。研究者は、自由にやっているといっても、インパクトファクター

に束縛された車の中に乗っているわけですし、自分たちで決めたパラダイムの中で走っています。それが本当に必要か。今回のノーベル賞がそれに近いかもしれませんが、非常にベーシックな発想から、本当に社会に開かれたところまでパスが行く確率はどのぐらいなのか。私はかなり小さいと思います。ただ、かなり小さいということが問題ではなく、また、それをスルーでサポートするシステムは、そう広くは作れないはずだと考えます。だとしたら、やはり研究者自身も研究そのものも変わっていく必要があります。

もう一つ言いたいのは、情報の洪水は、私はあまり望まないということです。何でもかんでもオープンアクセスになればいいというものではありません。

Glocal—地方大学に求められる学術情報とは？

もう一度、静岡大学の事例に戻らせていただきますが、私どものリポジトリでアクセスが多いのは、心理学、地方史、教育問題です（図 3）。こういうものは当然 STM のように国際ジャーナルには書かれていないわけです。ただ、現実を眺めると、こういうものがまさに静岡大学のリポジトリのボディとして求められていると言えなくはない。こういう側面を忘れてはいけないということです。

Glocal

- Well accessed articles of SURE are; psychology, local history, and problems related to elementary and junior high school education.
- So, not only articles published from international journals, in major STM journals, but “contents” which respond closely to the public interest are the dual contents to be opened at least for “local university”.

(図 3) Glocal